

詩時評

第35回

〈詩〉が成立する時

松本衆司

今時評の最後に取り上げた林嗣夫詩集『わが方丈記』には、後記にかけて「詩を生きた」ということ」という詩論が掲載されている。〈1、「志」について 2、「真情」ということ 3、伝統詩歌に学ぶ 4、「アニミズム」という思想〉の四章からなる秀逸なる詩論である。その4の最後部を引用する。「詩に關連してもう一つ大切なことを付け足すと、アニミズムの精神においては、例えば「宵待草」が「ヒト」の隠喩に（あるいはその逆に）なりえること、「落葉松」の林が「人の世」の隠喩に、「浅間嶺」のけぶりが「永遠なるもの」の隠喩になりえる、ということである。いやむしろ、隠喩の関係を読み取った時、そこに〈詩〉が成立する、というほうがいいかもしれない。このようにして、個は普通に通じていく。世界は飛躍していく。」

まさに詩の真髄へと導く論考である。

ひとみ・けいこ詩集『山葡萄』（ドットウイザード）を読む。「大切な風的时间」を引く。

ペランダの紫陽花を見る／窓ガラスがすぎとおっている／薔薇のプランターのまわりにかわいそうな枯葉がなくなっている／ベッドのシーツが清らかである／すべての寝室のカーテンが／生まれたての風にそよぐ／猫のアーモンドのような目に出会うと／絹糸のような毛の身体をすり寄せてくる／撫でていると、しっぽが曲がって立つている／わかっているでもできなかったことに／心を傾けるひと時がある／緩やかな風が私を誘う／いつもの時間の隙間から／空を見上げる／リノリウムを広げた空の床で／髪を靡かせ

優しい眼差しで何気ない日常のシーンを捉える。そのように一篇一篇の詩は綴られていき、一冊の詩集に結実する。そんな趣きだ。そして、その生への思いはこの引用した詩に込められてあるように、プラネットそして地球の営みへの眼差しまでもを含んでいる。

月川奈緒詩集『いちご月の夜』（澤標）を読む。「月ふたつ」を引く。

中秋の夜空に月煌々と わたしを照らし／龍頭の船から／手を差し伸べて／月を掬する平安貴族／あてやかな袖模様が／月明かりに映える／大沢の池に浮かぶ月 わたしをみつめる／わたしの横には／貴族のように澄ました顔／放生池に放たれた魚は／いつのまにか大きくなった／昇っていく天空の月は わたしに寄り添い／ふたりで赤い月をみながら／六年がたち／こうしてまた／一緒に満月みている／幽かに揺れる水面の月は あなたに寄り添う／ふたつの月のはざまに／満ちていく時間／遠くから笛の音が聞こえてきた

筆名による必然でもあろうか、彼女はアメリカ原住民の農事暦にある満月の名にテーマを見出す。あとがきで「月のひかりは、ありとあらゆる違いを区別しないで、どんな人もものも一律平等に照らしてしまっています」と言う。人々が古来求め続けてきた愛と願いのまことが古き都を舞台に綴られている。

立花咲也詩集『光秀の桔梗』（詩遊社）を読む。「音楽好き」を引く。

フェラホラフェラホラ／夫の鼻歌の珍しく曲名がわかったので／—その歌の歌詞なか

なかええやろ／私がいいかけると／夫はいやな顔をして／音楽に歌詞は邪魔や／わしらみたいなほんまの音楽好きは／メロディーがよかつたら／歌詞なんていらんねん／（CD一枚買ったのも見てないけど）／夫はフェラホラフェラホラ／上機嫌に歌いながら経済新聞を／食卓一杯に広げる

秀逸なタイトルの詩集だ。詩集は大阪市井の雰囲気満載の夫婦の会話や家族のやりとりがまるで四コマ漫画のように描かれている。家族愛と喜怒哀楽の交々を笑いとペーソスに昇華し、見事に描き切っている二四篇だ。

岡崎葉詩集「愚作の居場所」（出発社）はスペシャルModeratoと銘打つ。題詩を引く。

数独の空白を埋めるように／あの詩たちのページを定めなければ／せっかく綴った詩なのだから／やつと産んだ詩なのだから／初めは手書きのガリ版印刷／次はタイプ印刷で／それから売れ筋の詩集サイズを真似たり／名のある出版社に任せたりして／世に出してきた詩集／そこからこぼれ落ちた／眠りの詩にも光を届けてあげなければ／一冊の詩集には二、三編の読者のハ

トを捉える詩があればいいとして／その辺にまぎれて居続けられる／快適な場所を確保しよう／我慢強く生きてきたジンセイに／見限つていい言葉などあるはずもなく／全部が大事な言葉なのに／表現が拙いからという理由で／寂しい場所に置かれる詩たち／捨てがたいいのちの死たち／（ゴメンナサイ ゴメンナサイ／わたしはずっと傲慢でした／あの日のあなたに対して／自分の詩に対して）

どんな人間も愛を忘れて生きることなどできない。どんな宗教もそれを説いている。にも拘わらず悲しく憤るべき現実がある。だからこそ、人々はマザーテレジアに尊崇の念を抱く。愛の階段を何処までも降りた人だから岡崎葉の詩に仮託した愛が心に沁みる。

滝本政博詩集「エンプティチエア」（土曜美術社）を読む。「うたかた」を引く。

ほら 空はこんなに薄つぺらい蝶の翅／開閉し 反転する影絵だね／鳥影は擦り切れた音盤の中を飛び／歳月もぐるぐる回つてゆくのです／収穫の秋に子供が生まれ／子供は春には走りまわりました／子供は犬を飼い／何処に行くにも一緒に連れまわりました／生き そして 死にました／あの

人を愛しました／あの人にあうときはなにごともうわの空／駆け出して 胸に飛び込みました／あの人は毛並みにそって撫でてくれた／ひっくり返つてみる／でんぐり返つてみる／あの人の胸の中で／病院のベッドで目を覚ました／手術を受けるそうです／病院を抜け出して映画を観にゆきました／サーフィンの映画でした／スクリーンに海が映りました／ああ なんと美しいでしょう

「うたかた」とは水上に浮かぶ泡のこと。人もまた同じか、仏説のごとく生きとし生けるものは空なると。だとして、いかに生きるか。いのちの営みの尊さはやはり慈愛の行いに尽きる。この詩集の主題に寄り添う。

今井清博詩集「モカの香り」（滯標）を読む。表紙には赤い扉と窓枠の喫茶店の油絵、その扉をあける。「心のアルバム」を引く。

草はらに仰向けに寝転ぶと／風が吹くたび／カヤツリグサのてっぺんとまった／カマキリの三角頭が／フワッと目の前にせまり／スーッと遠ざかる／風が止むと／頭を垂れた猫じゃらしたちが／ないしよ話をしてくれた／ミミズがわしらの足をくすぐるので／わしらはネコたちのヒゲをくすぐ

るのサ／夕焼け雲の草はらで／ぺんぺん草の伴奏に／コオロギたちが鳴き出した／一番星／遠くで母さんが呼んでいる／こつそり歩き始めると／あまたのヌスピトハギが／おいて行くと／くつついてきた／いまはマンシヨンの群れが／アワダチソウの海に浮かんで／夕焼け雲のみが／むかしと同じ／友達だった草や虫たちはいずこへ／ないし／話も／草の波も／想いの底に／沈んだまま／見知らぬ人が／そっと／アルバムを閉じている

生活の利便性を只管求めた近代化は人々から故郷を奪い、都市化の名のもとに地方を奪った。そして、その光の届かないところは取り残され、人の住めない過疎地とした。気がつけば、我々現代人は都市に隔離されてしまった……。そんな近代化を憂う理屈を書けば、すぐに紙幅が足りなくなってしまうが、詩人はわずかな言葉で見事にその情景と悲しみを描き出す。それが詩の醍醐味だ。

市野みち詩集『風は笑って』（土曜美術社出版販売）を読む。「変身」を引く。

新芽から成長した緑へ／秋には見事に変身し／未練も残さず すっかり振り払う／人間はね／そんなに見事な変身は出来ない

／緑から黄色や赤へ余すところなく変化する／自然は／過去を引きずったりこたわったりしない／変身した葉をさらりと落とし／次の新しい一歩を踏み出す／清々しくくり返し／感動している自分がここに居る／風が笑って通り過ぎた

「行雲流水」という蘇軾の言葉の如く、やわらかな筋雲が風に漂い流れる。そんな爽やかな表紙に思わず装丁者直井和夫の名を確かめる。「人間はね／そんなに見事な変身は出来ない」と、人生を見つめ続ける市野みちの眼差しに相応しい装丁の詩集である。

網谷厚子著『日本の詩の諸相』（土曜美術社出版販売）を読む。「日本の詩は、研究も詩作も、まだまだ開拓すべき余地がある。鑑賞するばかりではなく、国内外にその魅力を積極的に発信する……」（「人はなぜ詩を求めるのか」本書を認めた詩人の思いがここににある。「聴覚」を刺激する一萩原朔太郎の詩を中心に」という章に、朔太郎の「月に吠える」の「序」が紹介されている。

私の詩の読者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や「ことがら」ではなくして、内部の核心である感情そのものに感触してもらいたいことである。私の心の「かなし

み」「よろこび」「さびしみ」「おそれ」その他言葉や文章では言ひ現はしがたい複雑した特種の感情を、私は自分の詩のリズムによつて表現する。併しリズムは説明ではない。リズムは以心伝心である。そのリズムを無言で感知することの出来る人とのみ、私は手をとつて語り合ふことができる。

かつての日本の若者にとって、萩原朔太郎の詩や詩論の言葉は心を込めて生きるための詩を求める指標であった。改めて現代詩の原点に触れる思いがした。デジタル化した現代の若者にとって朔太郎はどのように映るのか。

安俊暉英日詩集『武蔵野』水崎野里子訳（コールサック社）を読む。「Chapter 4 Moment 四章 一瞬」より

In Musashino / A path of fall leaves /
Like my life / It goes forward / It turns
back / In Musashino / Falling leaves /
Resemble me / One leaf / I picked up
武蔵野の／落葉道／わが人生のごとく／
行きつ／戻りつ／武蔵野の／落葉／
我に似たる／一つ／拾いにけり

詩人はある日「武蔵野」の語源が朝鮮語「苧種子野 Maosashino」であったことを知

った。それは紀元六〇〇年代頃の朝鮮から来た渡来人がもたらした麻の一種であり、芋の種子の野を意味する。そこから安俊暉の「武蔵野」が始まる。国木田独歩の『武蔵野』に描かれた自然や暮らしへの、或いは詩人の古里の風景への郷愁、そして古代への懐旧と現在を生きる愛と浪漫。それらの錯綜する想像の糸は自らの存在の在り処を浮き彫りにするプロセスでもある。

森下正義著『作才村を語る―作才村の丘のぼりて―』を読む。かつての和泉国南郡木嶋郷、現在の大阪府岸和田市作才町、筆者生誕の昭和四年時には泉南郡土生郷村大字作才土生は「はぶ」、作才は「まぐざい」と読む。その地名の由来も興味深いが、土地の変遷や暮らしを克明に書き記した郷土史であるとともに、まさに一冊の叙事詩でもある。

作才村は、江戸時代初期前後に土生村から分村して以来、第二次世界大戦の頃まで戸数50にも満たない小栗街道沿いの農業を中心とした一寒村に過ぎなかった。(略)貧困ゆえに「一村逃亡する」という悲しい逃亡事件が起きている。(はしがきより)

現代に生きる私たちは過去と未来の中間に立つ。過去を顧みれば、そこには生きた人々

の暮らしの痕跡がある。それは未来に向かうためにも知るべき過去なのだ。何故か、私たちはそこからこそ「生」の尊さを学ぶのだ。

林嗣夫詩集『わが方丈記』(土曜美術社出版販売)を読む。「白い雲」を引く。

気がついたら八十歳を越えていた／それがどうした、ということだが／さすがに世界が緩みはじめている／時間というものもが／水のように透明で柔らかかったのに／いま砂つぶのように音をたてている／ことばはせわしなく湿ったり 乾いたり／想像力も on of on /とぎれとぎれに散っていく／／ところがある日 空を見上げたら／ただ浮かんでいるだけの白い雲が／初々しい姿で輝いていた！／／こんな日もあるにはあるんだなあ／そばにひとがいて／手をつなぎたくなくなるような

もう一篇「不可視のもの」を引く。

触ってはいけないものに／触っていた／そのことに やつと気が付いた、／／とでもいうように／曲の終わったピアノリストが／鍵盤から／ゆっくりと 指をあげる／／何かを求めて／一つ一つ言葉をさぐり／言葉を拾い／また拾い直しながら進んでいたもの

が／もうこの先へ踏み込んではいけない／不可視のもの、の広がりを感じて／机の上／／そつとペンを置く／／そのような／詩の最後の一行に たどり着きたい

日本の詩界には達人とも言うべき詩人がいる。林嗣夫もその一人だ。後記にかえて掲載の「詩を生きる、ということ」という詩論の一文は帯文として使用されているが、紹介する。「美しいもの、善いものに出会いたい、合一したい。真なるもの、永遠なるものを垣間見たい、経験したい――それはこの世が苦し満ちているからこそ、誰の胸にも湧き起こる超越への思いである。〈詩〉はそこに直接かかわっていると考ええる。詩人として生きてきたその「志」を深く感じる。詩集のどの作品も読者を導くように語りかけてくる。

今年の三月十六日、大阪文学学校創立七〇周年記念祭がクレオ大阪東で開かれた。一九五四(昭和二九)年に誕生した夜の詩の教室がリベラルな文学への人々の思いに支えられ七十年の歴史を重ねた。その間に多くの優れた才能を世に送り出したことは言うまでもない。それは決して文学賞をとるとかおとないとかの話ではなく、修了生ひとり一人の文学による人生の研鑽の尊い輝きだと、信じたい。